

小説ほど面白いものはない 山崎豊子

■小説を書く職人だから、TV、ラジオに出演しない。

小説というものは、いかに風景描写がうまく書けてても、人間が書けてなきやダメです。もっとも人間くさい人間が自分のからだのなかにできて、その咳ばらいからおはしをもつときの指のかがめ方、チュッというお茶のすすり方、音声までハッキリ人間づくりができないと、わたしは書けないんです。だから、わたしは職人精神で、小説を書く職人として小説以外のことは、なにもしたくない。テレビ、ラジオもでない。

■名前のわりに所得が少なすぎる。

いままで一年一作主義ですね。

山崎 これも自分の納得のいくものを書いてたら一年一作だった、ということなんです。正直なことをいえば、一年一作では経済的にはラクでございません。皆さんのようにゴルフもしませんし、高いバーにもいきません。それでも一年一作主義を折らなきゃならないと思うくらいです。それは税金です。まず名前のわりに所得が少なすぎるということ。一年一作だから当然なんですね。それと困るのは、わたしは取材費を惜しまずに使うんですよ。それが必要経費として認めてもらえるといいんですけども、なかなか、そうはいかないんですね。一つの取材をして、それを材料に他にも小説を書くような器用な作家でないと、日本の税法ではダメなんでしょう。わたしは職人根性といいますかね、気楽に書いてお力ネがもうかる、なんていうものが書けないんです。

■悪人を描いた挿絵が要る。

山崎 わたしは権力の座にいる人が大っきらいなんです。狡猾なやつも大っきらいなんです。左右いずれを問わずですよ。日本の小説の気に入らないことは、どうしてみんな、きれいどとばかりで、いい人間ばかりを書くんだらうかということ。わたしは醜悪なやつを書くことによって、それをとおして人間本来の正しいあり方を表現できたらいいと思ってるんです。ですから、さし絵に困るんですよ。日本には悪人の描けるさし絵画家があまりいません。

■私が書きたいものを書いた。

松本 その読者がまた問題でね、いったいどこに照準を合わせるかだよ。中国に行った暗も、向うの作家が、中国は人口が多いと。自分が書く時に、どこに読者の目安を置いていいかわからないというんだよ。あなたはどうですかと私に質問なんだ。私は、それは日本においても同じだと。日本にもいろんな階級の人があり、いろんな知識の分野がある。また、男性もいるし、ど婦人もいる。けれども私が書く時には、結局、自分が読みたい小説を自分で書くと。ということは自分の興味のあるものは、恐らく一般の読者にも共通した興味に違いないということを感じて書いていると答えたわけですよ。

山崎 私も同じですね。読者のどこに目安を置くかなんていうこと、これは大海で粟粒を探すようなものでね、そんなものわかりませんよ。だから私が書きたいものを書いた。それを私と同じ共感をもって読んでくれる読者がいる。いつもそう信じて書いています。

松本 そうすると、いわゆる文壇小説——括弧つきの「純文学」でもいいけども——を書いている人は、その読者をどこに求めていると思いますか。

山崎 自己陶醉じゃないですか。そういう人たちは、自己至上即、芸術至上主義に溺れて書いているんです。

松本 しかし、自分だけのひとりよがりじゃ困るわけで、自分のために書いていることが、読者の共感、普遍性、そういうものに通じないと困るわけだ。

山崎 ずっと前、私は読者のために書いているといった時、軽蔑されましたよ。通俗的だと、大衆作家だと。私は、大衆作家といわれるのはありがたいと。私はトルストイは世界一の大衆作家だと思っていますもの。